学習院大学史料館
ミュージアム・レター
Gakushuin University Museum of History
Museum Letter No.48
発行日 ● 令和4年(2022)3月10日

もくじ

ごあいさつ …… 1
四谷校地時代の学習院 …… 2
『教学聖訓』／『学習院初学教本』 …… 4
「東洋学」のはじまり―白鳥庫吉と近衛篤麿 …… 5
学習院輔仁会／学習院出身の『白樺』同人たち …… 6
『白樺』同人たちの揺籃期―明治30年代の学習院と美術 …… 8

『教学聖訓』明治30年頃〔当館蔵〕

ごあいさつ

学習院大学史料館では、令和4年3月28日(月)から6月3日(金)まで、北2号館1階の展示室で春季特別展「揺籃期の学習院―四谷校地のころ―」を開催いたします。これに関連して5月よりWEB上で、明海大学講師の中嶋諒氏による史料館講座「学習院の東洋学」も配信されます。

これまで特別展では、京都、神田・虎ノ門、そして目白の地における学習院を取り上げてきましたが、今回は、目白に移転する前の四谷校地時代に注目します。この時代には、学則が制定され、独自の教科書が発行され、わが国の東洋学教育の嚆矢ともいえる課目が開設されました。のちに白樺派と呼ばれる学生らが『学習院輔仁会雑誌』の編纂等に携わったのも、やはりこの時代でした。まさに揺籃期といえる学習院において、特色ある教育・研究の礎が確立されていく過程や、学生らが残した文化的な足跡をご覧いただければ幸いです。

最後になりましたが、展覧会の開催にご尽力・ご協力いただいた一般社団法人 霞会館、学習院アーカイブズ、大学図書館などの関係各位に、心より御礼申し上げます。

(史料館長　水野謙)

揺籃期の学習院
―四谷校地のころ―

幕末の京都に淵源を持ち、明治10年(1877)神田錦町の地に開校した学習院は、校地を虎ノ門、四谷区尾張町へと移転したのち、現在の目白に校舎を構えました。令和4年春、学習院大学史料館では、明治23年から同41年に至る、四谷校地時代の学習院をテーマとした展覧会を開催いたします。

当時、第4代院長を務めていた三浦梧楼(ごろう)は、「学習院学則」を制定するなど教育体制の改革を進めました。華族の地位本分に適した教育を施すため、また軍務に服する志操を養うため、道徳と武課(体育)教育を重視します。天皇の勅語などを集めた『教学聖訓』や、学習院独自の教科書である『学習院初学教本』などが編纂され、日本初の「東洋諸国歴史(東洋史)」課目も設けられました。そして第7代院長近衛篤麿(このえあつまろ)は、華族が従事すべき職務として、貴族院議員と武官のほかに外交官をあげ、その人材育成に力を尽くしていきます。

明治30年代には、校友会組織「学習院輔仁会」の活動が盛んになり、『学習院輔仁会雑誌』には、のちに雑誌『白樺』同人として活躍する志賀直哉・武者小路実篤・木下利玄(としはる)・柳宗悦(むねよし)らの名を随所に見ることができます。

この展覧会では、当時の教科書や、武者小路らが描いたデッサンなどの教育資料のほか、明宮嘉仁(はるのみやよしひと)親王(のちの大正天皇)がこの頃に着用していた制服などを紹介いたします。

“揺籃期”ともいえる四谷校地時代の学習院をお楽しみください。

(助教　谷嶋美和乃)

四谷校地時代の学習院

明治10年(1877)神田錦町に開校した学習院は、同19年の火災によりその校舎を焼失し、同21年に旧工部大学校の敷地である虎ノ門に移転する。しかし、その位置や建物などに教育上不便な面があること、修繕に多額の費用がかかるとして、今度は赤坂離宮の隣の四谷区尾張町および仲町の御料地に校舎が新築されることとなった。新校舎の建築は同22年9月に着手され、翌年8月に完成。9月11日に始業式が挙行された。

三浦梧楼院長の改革

当時第4代院長を務めていた三浦梧楼は、四谷の新校舎建築に関わったほか、多くの教育体制の改革を行い、諸制度と組織の整備を進めていった。

明治22年(1889)2月11日、憲法発布と同時に貴族院令が公布され、華族は新たに政治上の特権と義務を与えられることとなり、華族子弟の教育がより重要視されるようになった。また、同年7月10日の学習院卒業証書授与式に、「学習院は平素から生徒の軍務に服するの志操を養成し、陸海軍学校へ進む素地をつくるように」との沙汰があった。こうした状況下で、三浦はこれまで学習院の諸規則が院長の替わるたびに変更されてきたことを遺憾に思い、確固とした教育方針を確立させるため、従来の「学習院規則」および学科課程を廃し、同23年7月28日、新たに「学習院学則」を制定したのである(同年9月1日施行)。

その第一章総則第一条に「学習院ハ専ラ天皇陛下ノ聖旨ニ基キ華族ノ男子ニ華族ニ相当セル教育ヲ施ス所トス」と、学習院の教育目的が示された。第二条に学科は初等学科(満6-12歳)・中等学科(満12-18歳)・高等学科(満18-21歳)・別科(満21-24歳)・海軍予科(満15-18歳)の五種に定められた。学科の諸課目は、国漢文・数学・理学・芸術・欧文・歴史地理・政学・法学・哲学・武課の十種に分けられ、各教課を通じて道徳・知力・気品・体力の養成が期された。道徳については修身・倫理等の課目を設けず諸課目においてその涵養が図られ、こうした教育方針にあわせて、学習院独自の教科書『学習院初学教本』が編纂されたほか、習字・外国語・図画など各種の教科書が刊行されていった。また、学習院の教学の基準を示すものとして天皇の勅語などを集めた『教学聖訓』が全教職員・学生に配布された。

●三浦院長の改革

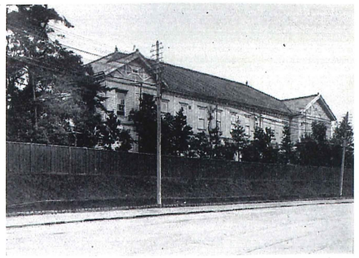
- ○学習院学則の制定
- ○教科書および『教学聖訓』の編纂
- ○学習院官制・服務細則の制定および教員会・評議会の設置
- ○学生心得・寄宿舎規則等の整理・改定
- ○四谷区尾張町の新校舎建築
- ○輔仁会の創設

四谷の校地

明治22年(1889)、虎ノ門から旧華族女学校のあった四谷区尾張町への移転が決まると、新校舎の建築が始まった。四谷への移転は翌年の9月3日に完了し、通学に不便であった本所・深川・浅草・下谷に住む初等学科生のために帝国博物館附属地に建つ華族会館所有の建物を使用した上野分校とともに、11日に授業が開始されている。

四谷校地の総面積は2万437坪(約6万7560㎡)で、渡辺譲の設計による煉瓦造りの二階建ての本館のほか、寄宿舎・柔道教場・厩・柔軟体操場・幼年学生運動場・青年学生練兵場・植物園・馬場があった。本館は、正堂や図書館、初等・中等・高等学科の各学年の教室や、博物・図画・習字・唱歌教室など多くの教場があり、同27年の地震の被害を受けるまで使用された。

幼年寄宿舎(学習院アーカイブズ蔵)



青年寄宿舎(学習院アーカイブズ蔵)

同25年3月の三浦退任後、爵位局長兼侍従職幹事であった岩倉具定が院長を兼任するも、10月には田中光顕が院長に就任した。田中は高等学科修了後、さらに専門的な学術を修めようとする学生のために設けられた別科を大学科と改称する。その第1回卒業生を出すにあたり、同27年には帝国大学に次いで学習院においても学士号が授与できるよう学則を改正、7月卒業の大学科生3名が初の学習院学士となった。

四谷の学習院本館〔学習院アーカイブズ蔵〕

近衛篤麿院長による外交官育成

次いで、明治28年(1895)第7代院長となった近衛篤麿も、就任直後から学習院改革に取り組み、華族が従事すべき職務として、貴族院議員と陸海軍の武官のほかに外交官をあげ、その人材育成に尽くすべく、翌29年に大学科と高等学科の教課課程を改正した。欧文課の授業時間を増やすなど語学に重点をおき、のちに初等学科や中等学科の課程も改正している。

この改正により、教員の確保が困難なことから正規の課程が一時中止されていた大学科が復旧、同31年9月の授業開始に向けて教員の確保が求められた。専任の教員を養成するため、教授らを留学させ、また、学生を広く一般から募集した。しかし、高等学科卒業生は帝国大学に入学する者も多く、学生数は期待通りに増えず、さらに、同37年1月に近衛が病没したことから、授業開始の7年後である同38年に大学科は廃止となった。

再びの校地移転

四谷に移転した4年後の明治27年(1894)6月20日、明治東京地震が発生。本館の建物に亀裂が入り、使用不可となったことから、その後の授業は寄宿舎で行われることになった。そのため学生の寄宿は停止され、校舎近くの民家一軒を借りて仮寄宿所が設けられたほか(同30年7月閉鎖)、公的な寄宿舎とは別に教官が学生を自宅に寄宿させる例がみられ、近衛院長の命により同30年から四谷区愛住町に個人的な小寄宿舎「主一館」も開かれた(近衛死去後に閉鎖)。また、本館2階にある正堂も被害を受けたため、地震以後の卒業証書授与式は赤坂離宮を借用して行われている。

本館校舎は基礎造りが不完全で、修理をしてもそのまま使用するのは危険であること、民家が接近していて火災や流行病のおそれがあることなどから校舎の移転が提起された。田中院長による富士山麓、大森移転案、近衛院長による小田原移転案があがるも、戦争による中断や反対する者も多くいずれも廃案となった。最終的に近衛による北豊島郡高田村(目白)移転案が裁定され、同30年に新校舎建築が決まるも、財政上の問題もあり、中等・高等学科の移転が完了したのは同41年8月のことであった。なお、初等学科は移転案が市外だったこともあり、四谷校地の西南隅(仲町第二御料地)に校舎を新築することとなり、同32年7月に学習院正堂とともに新校舎が完成した。

(助教　谷嶋美和乃)

四谷時代の歴代院長

何代目 名前(生没年)
在任期間(M=明治、T=大正)
爵位 就任時の官職

4代 三浦梧楼(1847-1926)
M21.11.5 - M25.3.26
子爵 陸軍中将

5代 岩倉具定(1852-1910)
M25.3.26 - M25.10.20
公爵 爵位局長兼侍従職幹事

6代 田中光顕(1843-1939)
M25.10.20 - M28.3.19
伯爵 宮中顧問官兼帝室会計審査局長

7代 近衛篤麿(1863-1904)
M28.3.19 - M37.1.2
公爵 貴族院仮議長

8代 菊池大麓(1855-1917)
M37.8.4 - M38.10.12
男爵 文部大臣

9代 山口鋭之助(1862-1945)
M39.1.18 - M40.1.31
学習院長事務取扱

10代 乃木希典(1849-1912)
M40.1.31 - T元.9.13
伯爵 軍事参議官

『教学聖訓』

三浦梧樓院長は明治25年(1892)2月、同4年以来華族あるいは学習院に賜った勅語・令旨および国民一般に賜った勅語・詔書のうち、教学に関するものを『教学聖訓』として編纂し、全教職員・学生に配布した。

冒頭には「抑本院教学ノ標準ハ盡ク此書ノ中ニ在リ各自宜ク昕夕奉読玩味シ以テ益聖旨ヲ闡揚セン事ヲ期スヘシ」と記されている。同28年1月からは毎週月曜日の第一時限開始前に、担任教員が教育勅語を読むこととなり、のちに修身の教材としても使用され、学生は毎日持参していたという。教職員は就任時に、学生は入学式の日に院長から手渡され、女学部には同44年から配布されている。内容は同30年以後増補が施され、歴代院長によって書かれた題箋が貼られた表紙の体裁を変えながら、学生への配布は終戦まで続いた。

左上から時計回りに、M30、S17、S4、S15、S17、M25（題箋欠）頃のもの。(M＝明治、S＝昭和)〔当館蔵〕

当館所蔵の明治、大正、昭和時代の様々な年代の『教学聖訓』は、それぞれ秩に入れられ、主に女学部のものは各自で手作りしたと思われる布袋とともに残されており、長年にわたり教学の精神が伝えられていたことがうかがえる。

（助教　谷嶋美和乃）

『学習院初学教本』（全12巻）

学習院が独自に編纂・発行した教科書のひとつで、初等学科の国語課で用いられた読本である。凡例には「徳性ヲ涵養シ智能ヲ啓発スルヲ主トシ併セテ言語文字文章ヲ知ラシムルニ在リ」と記され、三浦院長が華族子弟の教育にあたり重視していた修身(道徳)を兼ね備えた内容となっている。編纂には学習院御用掛(のちに次長)高島信茂と初等学科の国語課教授らがあたり、明治23年(1890)から同25年まで吟味を重ねて起草したのち、学習院幹事工藤一記や教授白鳥庫吉(くらきち)ら中高等科教授10名による審査を経て、一之巻は同26年10月に発行、以下は翌年8月までに順次発行された。

課題は歴史・地理・理科など各教科の知識や歴史上の人物の伝記などに、修身教育の要素を織り込んでいる。歴史は神武天皇に始まり憲法発布に至るまでの事柄を述べ、地理は主に辺要の地を挙げて国の領域を明らかにし、理科では動植物の特性や効用を読物とした。各課題には関連性がもたされ、例えば3巻では兎と亀の生態を紹介した後に、寓話「兎と亀」を載せている。各巻の課題から、第1課と最終課の題を挙げておく(*は唱歌)。1巻1課「メ(目)」、2巻最終課「三千よ万*」、3巻「けうぢやう(教場)」「きるべし*」、4巻「神武天皇」「日本男児*」、5巻「やまとたけるのみこと」「靖国神社」、6巻「神功皇后」「我大君*」、7巻「仁徳天皇」「五日の風*」、8巻「八幡太郎義家」「天つ日嗣*」、9巻「国体」「楠木正成公　二」、10巻「楠木正行公　一」「治まる御代*」、11巻「日本刀　一」「凱旋*」、12巻「後光明天皇」「憲法発布ノ頒」。

二之巻（表紙）〔当館蔵〕

同左 第三十一課（部分）

華族の子弟は軍人になることが勧奨されていたため、勉学に励むのみではなく、外でよく遊び運動をして、強い身体を作ることも奨励されていた。右に挙げた1年級の課題はその教えが顕著なものである。本書に描かれるのは学習院の制服を着た子どもであり、学生たちは自身の行動規範としてこの教科書に接したことだろう。本書は、学習院でも国定教科書が使用される同37年まで用いられた。

（EF共同研究員　戸矢浩子）

二之巻 第三十一課

おとうと
「兄さん、私は、おほきくなりてから、かいぐんのしくわんに、ならうと思ひます。おととさまが、かいぐんの士官になるには、舟にのることにも、なれて居らなければならんとおほせられましたから、明日、すみ田川に行き、舟にのりて、あそびませう。」
兄
「おまへは、つねに、よくべんきやうするから、つれて行きませう。」

「東洋学」のはじまり　―白鳥庫吉と近衛篤麿

三浦梧樓院長の教育改革の一環として、明治23年(1890)に「東洋諸国の歴史」が開設され、白鳥庫吉(1865−1942)がこれを担当した。当時の日本には、東洋の歴史を体系的に学ぶ課目はなかったため、これがまさしく日本における「東洋史」の教育のはじまりであったということができる。

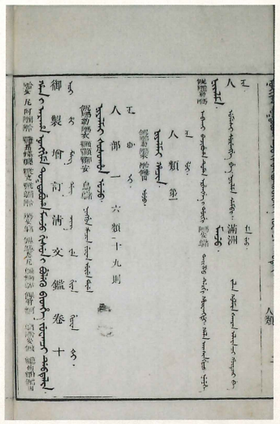
さて白鳥の関心は、中国、朝鮮のみならず、満洲、モンゴル、中央アジアなどの東洋諸民族の歴史にまで及び、これらにかんする卓越した研究成果を残した。いま学習院大学図書館には、中国清朝に刊行された『御製増訂清文鑑』という満洲語の辞典を収めるが、そこには満洲文字とアラビア文字で「白鳥」と読める朱筆のサインが残されている。このことから白鳥が、学習院において満洲語の学習にいそしんでいたことが窺えるのである。

また第7代学習院長をつとめた近衛篤麿(1863−1904)は、明治30年(1897)、学生の勉学の助けとするために、近衛家のコレクションである陽明文庫のうち、漢籍を中心とする蔵書の一部を学習院の図書館に寄託した。この蔵書は、同39年頃に近衛家に返還されたが、その後も、それを収蔵するために用いられていた木箱は転用されることとなった。これらの木箱には、「陽明文庫図書」と記されたラベルが貼られたままになっており、当時の様子を垣間見ることができた。いまその木箱のひとつが当館に収められ、保存されている。

このように白鳥と近衛は、学習院における「東洋学」教育の創生と発展に、大きな役割を果たした人物といえるのである。

参考文献：学習院・永青文庫・東洋文庫編『東洋学の歩いた道』(2013年)

（客員研究員　中嶋諒）

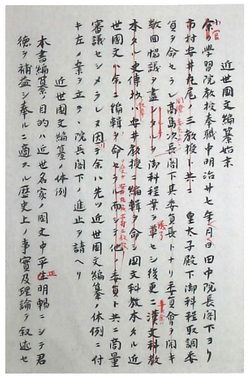

傅恒(等)奉勅撰『御製増訂清文鑑』（部分）
中国 清時代 光緒25年(1899)〔学習院大学図書館蔵〕

巻九表紙見返しより白鳥庫吉署名
(上は満州文字、下はアラビア文字)

木箱・ラベル　明治30年(1897)頃〔当館蔵〕

ラベルの拡大写真

萩野由之博士史料


萩野由之「近世国文編纂始末」（部分）
明治29年(1896)〔当館蔵〕

萩野由之(1860−1924)は、明治期から大正期にかけて活躍した国史学者、国文学者で、明治25年(1892)より学習院教授をつとめた。同27年には、明宮嘉仁親王(のちの大正天皇)のために『近世国文』を編纂し、これはまた学習院の学生のための教科書としても用いられることとなった。

現在、萩野の蔵書の多くは、九州大学附属図書館などに収められるが、萩野の死後も長く子孫の邸宅に保管され続けた史料が、いま「萩野由之博士史料」として当館に収蔵されている。そこには「近世国文編纂始末」と題する書きつけなど、学習院の教育の歴史を知るうえで有益な資料も多く含まれている。

（客員研究員　中嶋諒）

学習院輔仁会

明治22年(1889)三浦梧樓院長は、学習院の創立当初から多くあった運動関係をはじめとする学生の小団体を一つにまとめようと、学生有志の活動を包括する校友会組織として「学習院輔仁会」を創設した。会名は『論語』顔淵篇の「君子以文会友、以友輔仁」(君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く)による。4月6日の開会式前日に会則が定まり、編纂部・演説部・運動部・英語部・仏語部・独語部の六部が発足した。輔仁会では、各部主催の行事のほか、全体の行事として輔仁会大会と陸上運動会が行われた。

同23年6月、編纂部によって発行された『学習院輔仁会雑誌』(以下、『輔仁会雑誌』)は、全国諸学校の校友会雑誌のうち最も古いものの一つであり、その刊行は現在まで続いている。創刊当初の内容は、教員による論考、学生の和歌・漢詩などの文芸作品や論説、意見・提言・報告文が主流だったが、のちに紀行文や海外文学の翻訳・紹介を掲載するなど、形式や内容を変えていった。游泳・軍事演習・満韓旅行についての詳細記事や、雑報欄には学校行事をはじめ、各部の活動や大会の報告が記録されており、当時の学校生活の様子を伝える貴重な資料となっている。

学習院出身の『白樺』同人たち

明治43年(1910)4月に創刊された文芸雑誌『白樺』。その第1巻第1号の目次に名を連ねる武者小路実篤、児島喜久雄、木下利玄、郡虎彦、里見弴、有島武郎、志賀直哉、正親町公和をはじめとする『白樺』同人の多くは、四谷の学習院で学生生活を過ごした。

当時の『輔仁会雑誌』を見ると、作文や和歌などの文芸作品以外にも、各部の例会や輔仁会大会などの活動記録においても彼らの名前が随所に確認でき、様々な場で活躍していた様子がうかがえる。彼らは編纂部や邦語部など輔仁会の活動を通して、同級生だけでなく先輩後輩との学年を超えた交流がなされ、その親交は卒業後も続いたのである。

高等学科卒業前の記念写真　明治39年(1906)〔学習院アーカイブズ蔵〕
前列左から2人目より志賀、細川、木下。前列右端に武者小路。

四谷校地時代の学習院

年	出来事
M30	小寄宿舎・主一館を開設(〜M37年1月)
M31	9月、大学科の授業開始
M32	7月、初等学科新校舎・正堂竣工 8月、上野分校廃止 9月、海軍予科廃止
M33	1月、輔仁会会則改正(文芸部と体育部とする) 9月、学習院外国留学生規程を制定
M36	7月、輔仁会新規則制定、5部に改編(編纂部・研究部・水上部・陸上部・会務部)
M37	8月、菊池大麓が第8代院長に就任(〜M38年10月) 11月、高等学科以下の全学生に通信簿(連絡簿)を配布
M38	7月、卒業証書授与式で成績優秀者に華族会館賞牌の授与を開始 9月、大学科廃止
M39	1月、山口鋭之助が第9代院長に就任(〜M40年1月) 4月、華族女学校を学習院に併合し、学習院女学部と改称 学習院学制・学習院規則を制定(年度の開始月を9月から4月に変更) 7月、目白校舎新築工事開始
M40	1月、乃木希典が第10代院長に就任(〜T元年9月)
M41	4月、迪宮裕仁親王(のちの昭和天皇)初等学科入学(T3年卒業) 8月、中等・高等学科の目白校地への移転完了

【主要参考文献】『学習院の百年』(1978年)、『学習院百年史』(1981年)

M＝明治、T＝大正

◇回覧雑誌『暴矢』(のちの『望野』)明治41年7月〜同42年4月

◇志賀直哉(1883－1971)
虎ノ門時代の明治22年(1889)に予備科6級(のちの初等学科1年)に入学。同28年中等学科に進学、2年の時に有島壬生馬らと「倹遊会」(のちの「睦友会」)をつくり、回覧雑誌を発行する。同35年2度目の落第で6年の正親町公和・木下利玄・細川護立・武者小路実篤と同級生となり、同36年に進学した高等学科もともに過ごし、同39年に卒業した。文芸活動に熱中するだけでなく、棒高跳び・ラグビー・ラクロス・競漕・陸上競技にも取り組み、同34年の春季競漕会では優勝、同35年の柔道紅白勝負では三人抜きをしている。

◇武者小路実篤(1885－1976)
明治24年(1891)に兄公共も通う初等学科に入学し、修了時の成績は49人中3番で、褒詞を受けた。同30年中等学科、同36年高等学科に進学、志賀とともに邦語部に所属し委員を務めるほか、年に数回図書館で行われる例会の演説等に度々登壇。『輔仁会雑誌』にその記録や批評が記されている。同40年に正親町(公)・木下・志賀と合評会「十四日会」を結成、翌年に『暴矢』を発行する。

◇木下利玄(利玄)(1886－1925)
明治24年(1891)に初等学科に入学、武者小路と同級であった。同30年中等学科に進学、寄宿舎主一館で6年間を過ごす。同32年佐佐木信綱の竹柏園に入門。5年の時に正親町(公)・細川らと「暁会」をつくり、回覧雑誌を発行。同36年高等学科に進学、『輔仁会雑誌』の編纂部委員に選ばれる。同誌には「はるさむ」「里杲」という筆名も用いて数々の和歌を発表している。成績優秀で、中等学科1・3年は優等賞、高等学科3年は褒状で修了している。

◇正親町公和(1881－1960)

○回覧雑誌『麦』明治41年10月〜同42年10月

○山内英夫(里見弴)(1888－1983)
有島武郎・壬生馬は兄。明治29年(1896)に初等学科3年に編入。同33年中等学科に進学、正親町実慶・児島喜久雄・園池公致・田中治之助とは同級であった。壬生馬を通して親交のあった志賀の「睦友会」をまねて、児島らと「壬寅会」(のちの「絢友会」)を結成。同39年高等学科に進学、『輔仁会雑誌』に「伊吾」の名でモーパッサンやチェーホフの翻訳などを発表した。3年の時に『望野』に刺激され、児島・園池らとともに『麦』を発行する。

○園池公致(1886－1974)　○正親町実慶(日下諗)(1887－1938)
○児島喜久雄(1887－1950)　○田中治之助(雨村)(1888－1966)

□回覧雑誌『桃園』明治42年2月

□柳宗悦(1889－1961)
明治28年(1895)初等学科に入学。同34年中等学科に進学し、同39年に正親町(実)・郡とともに『輔仁会雑誌』編纂部委員となる。同40年高等学科に進学し、神田乃武・鈴木大拙・西田幾多郎らに学ぶ。同42年に先輩らの影響を受け、郡と『桃園』を発行。初等学科からほとんどの学年を優等賞・褒詞・褒状・華族会館賞牌(同38年以降)で修了するなど、成績優秀であった。同43年、恩賜の銀時計を得て卒業。卒業式では「国史講義(国文々学史の一節、古今和歌集の選者及其特色に就て)」と題し、皇太子御前講演を行った。

□郡虎彦(1890－1924)

有島武郎(1878－1923)　有島壬生馬(生馬)(1882－1974)　細川護立(1883－1970)　長與善郎(1888－1961)

月刊雑誌『白樺』明治43年4月〜大正12年8月

(助教　谷嶋美和乃)

概略年表

年	出来事
M23	6月、『学習院輔仁会雑誌』創刊 7月、学制取調書が裁可される 学習院学則を制定 8月、学生心得を制定 白鳥庫吉が学習院の教授となる(歴史教育・〜T10年4月) 9月、四谷へ移転完了。四谷本校と上野分校で授業開始
M24	6月、第一回輔仁会大会開催 10月、『初等学科習字帖』を発行(学習院発行の最初の教科書。以後各課の教科書を順次発行)
M25	2月、『教学聖訓』を教職員・学生に配布 3月、岩倉具定が第5代院長に就任(〜M25年10月) 8月、宮内省が華族就学規則を改正 10月、田中光顕が第6代院長に就任(〜M28年3月)
M26	2月、輔仁会会則・同細則制定(文学部と武術部に統合し組織を簡略化) 10月、学習院独自の読本『学習院初学教本』を発行
M27	4月、華族女学校に幼稚園を設置 6月、明治東京地震発生 8月、大学科正規課程を一時中止
M28	3月、近衛篤麿が第7代院長に就任(〜M37年1月)
M29	7月、大学科・高等学科の教課課程を改正(のちに初等・中等学科も改正) 9月、近衛院長が校地の北豊島郡高田村(目白)移転案を宮内省に上申 12月、輔仁会会則改正(文芸部・体育部・物品取扱部を設置)

(作成：リサーチ・アシスタント　小口康仁)

『白樺』同人たちの揺籃期—明治30年代の学習院と美術

作家志賀直哉や武者小路実篤が美術に造詣が深く、自ら絵筆をとったことはよく知られている。彼らは明治43年(1910)に創刊した雑誌『白樺』に西洋の絵画・彫刻の図版を掲載し、展覧会を開催するなど、西洋美術の紹介に貢献した。『白樺』同人らが西洋の絵画技法の基礎を学んだ場は、学習院の図画課の授業であった。

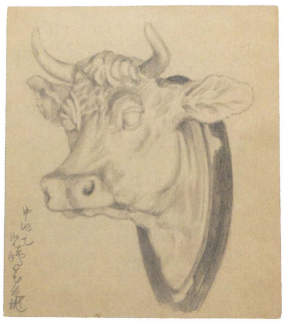
学習院の図画課は初等学科4年級より、鉛筆を用いる「西式画」と、毛筆を用いる「和様画」の2課に分かれ、学生はそのいずれかを選んだ。『白樺』同人の多くは中等学科(満12歳から6年制)で「西式画」を選択している。中等学科3年級までは手本を写す臨写を課題とし、4年級以後は主に実際の風景や石膏像などを前に写生をおこなった。本頁に掲載する図はその課題作品で、同じ課題を描いていても、線の太さや濃淡の具合、陰影の付け方などに各々の表現を見てとれる。

『白樺』同人らが中等学科に在籍していた明治30年代は、白馬会などの洋画団体が活発な活動を見せ、社会的に美術が流行していた時期であった。その流行は学習院の学生にもおよび、明治34年には当時中等学科2年級の児島喜久雄が、雑誌『明星』に作品を掲載されている。同35年3月の『学習院輔仁会雑誌』57号には自称「美術家」の学生が登場し、同会の絵画小品募集に際して「僕等は喜こばしくつてよろこばしくつて日夜其考案に暇を費やしている」と興奮を隠せない。修学希望者も増えたことから、同年11月には、西式画の教授松室重剛が「画学随意科」設置を希望する上申書を書いたほどである。こうした学生らの美術への意欲は、桜虹会(後の輔仁会美術部)に結実する。同会は同36年の輔仁会春季大会で初の展覧会を開き、翌年の秋季大会には油絵や水彩画など百数十点を陳列した。展覧会は好評を博し、以後は輔仁会大会での開催が恒例となった。

松室は先の上申書に、画学の修学は「志願者等ノ高等技藝ニ遊テ優美ノ品性ヲ養フコトヲ得ルノミナラス、其成作物ハ他学生ノ眼目ニ触レテ自然ニ感化ヲ一般ニ及ホ」すと述べている。学生たちは、輔仁会の雑誌や大会を通じて、同世代の創作する美術や文芸に触れ、互いに感化していたことだろう。こうした風潮の学習院の中に、『白樺』同人たちは10代の学生時代を過ごしていたのである。

(EF共同研究員　戸矢浩子)

志賀直哉〈3年〉
「ヴォルテール頭像」M31年頃



児島喜久雄〈4年〉
「牛頭部」M36年頃

武者小路実篤〈2年〉
「風景」M31年頃

正親町実慶(日下諗)
「風景」M34年頃

園池公致
「ラファエル少女頭像」M37年頃

田中治之助(雨村)〈5年〉
「ラファエル少女頭像」M37年頃

武者小路実篤〈2年〉
「獅子全身像」M31年頃

柳宗悦
「獅子全身像」M35年頃

Mは明治、(　)内は筆名、〈　〉内は記名に付された学年。〔当館蔵〕

学習院大学史料館からのお知らせ

令和4年度学習院大学史料館春季特別展

「揺籃期の学習院—四谷校地のころ—」

【主催】学習院大学史料館
【共催】一般社団法人 霞会館
【協力】学習院アーカイブズ、学習院大学図書館
【会期】令和4年3月28日(月)～6月3日(金)
開室：月～金曜　12:00～15:00
閉室：土・日曜、祝日
【会場】北2号館1階　学習院大学史料館展示室　＊入場無料

【関連講座】第94回学習院大学史料館講座

「学習院の東洋学」

講師：中嶋諒氏(明海大学講師／当館客員研究員)
※WEB上にて5月中旬頃より配信予定

ミュージアム・レター第48号

令和4年(2022)3月10日発行
〒171-8588　東京都豊島区目白1-5-1
電話　03(5992)1173
FAX　03(5992)9219

Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館
https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua